様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：７２６２２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ０１３０２

研究課題名（和文）公論と暴力－革命の比較研究

研究課題名（英文）Pen and Sword in Modern Revolutions

研究代表者
三谷　博（MITANI, HIROSHI）

公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員

研究者番号：５０１１４６６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は世界で初めてのグローバルな革命比較である。従来の比較研究は主に大西洋を挟む地域を対象とし、その解釈はフランスとロシアをモデルとしてきた。我々は、比較対象に日本やイランを加え、日本の経験から、大きな流血を伴わない革命の条件を探り出した。その条件とは交渉による決定やイデオロギー対立の回避という政治文化である。他方、西洋には日本にはなかった重要な要素があった。議会、討論とメディア、そして代替秩序の構想などである。革命では一般に言論と暴力が相乗的に昂進する。その分離をどう行うかが重要であるが、それには長年月、ときに80年近くもかかることが分った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会改革に暴力は必須だろうか。ボリシェヴィキ革命の成功以来、これを肯定する考えが世界に拡まった。しかし、明治維新は世襲身分制の廃止を僅かな犠牲（3.1万人）で成し遂げた。この史実は犠牲の少ない社会変革の可能性を示唆する。従来の革命比較はロシア革命、さらにフランス革命をモデルにしてきたため、暴力への態度は曖昧だった。この研究は、明治維新から出発して、他の革命で暴力がどう拡大し、どう終熄したかを分析し、今後の人類に暴力発動の過去を反省し、暴力なき社会改革を考える手掛りを供しようとする。

研究成果の概要（英文）：This study is the first global comparison of revolutions. Traditional comparative studies have focused primarily on the transatlantic region, with France and Russia as models for their interpretations. We have added Japan and Iran to the comparison and have drawn from the Japanese experience to explore the conditions for revolutions with less bloodshed. These conditions are a political culture of negotiated decisions and avoiding ideological conflict. On the other hand, there were important elements in the West that Japan did not have: parliaments, debate and media, and the idea of an alternative order. In revolutions, speech and violence generally rise synergistically. Making that separation is important but can take many years, sometimes close to 80 years.

研究分野：比較史　日本史

キーワード：革命　公論　言論　暴力　犠牲　メディア　比較　歴史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

革命の研究は前世紀末に社会主義体制が崩壊して以来、下火になってきた。しかしながら、世界にはいまなお政治目的の達成のために暴力とプロパガンダへの訴えを躊躇わないという風潮が蔓延している。その一因には、ボルシェヴィキ革命が成功し、世界各地で根本的改革を望む人々がその手法を模倣したことがあると考えられる。これに対し、明治維新での暴力行使は最小限に留まった。その死者 3.1 万人は、フランス革命の約 64 万人（内乱のみで）と比べて一桁少なく、ロシア革命や中国革命と比べると二桁は少なかったように思われる。研究代表者は明治維新の研究者であるが、2017 年、王政復古 150 周年の前年に、通史『維新史再考』（NHK ブックス）を公刊した。そこでは維新を、通説が専ら着眼した尊王攘夷運動だけでなく、「公議」「公論」の運動も軸にして描いた。かつ、その著述を通じて、次の課題として、上記の犠牲僅少の事実が何に由来するのか、かつそれは「公議」「公論」の運動とどう関係していたかという問題に思い当った。これらを解明するには、他の近代革命と比較して、その条件を探り出さねばならない。

他方、研究代表者は 10 年ほど前から山崎耕一氏の主催するフランス革命研究会に加えていただき、該革命とその背景について学んできた。幸い、山崎氏は拙著の翌年に最新の研究を盛込んで通史『フランス革命』（刀水書房）を公刊され、ここに比較のための確かな手掛りが得られた。そこで、研究代表者はさらに歩を進め、グローバルな近代革命の比較を企画して、2019 年に科学研究費の助成を得、5 年間の共同研究を立ち上げた。そこでは、イギリス、アメリカ、フランス、ロシア、中国など、今までもしばしば取上げられてきた革命を取上げる一方、今まで見過されてきた日本、イラン、中東の革命も俎上に載せることとし、それぞれについて優れた業績を挙げてきた国内外の第一線研究者に参加を仰いだ。

２．研究の目的

基本課題は革命に伴った犠牲の実態を明らかにし、それを抑制する条件を探り出すことである。学界に対して狙ったのは、20 世紀末の社会主義体制の崩壊に伴って忘却され始めた近代の諸革命の実際を、新たな世代の新たな眼を通じて再検討することである。この見直しに当っては、以前は無視されてきた明治維新やイラン革命、中東の革命などを比較対象に組込むこととした。従来はフランス革命やロシア革命をモデルとして他の革命を評価・理解することが一般的だったが、比較の範囲を拡げると、最近に世界の歴史学界の常識となってきたグローバルな視野が開け、同時に新たな発見も可能となるはずと期待した。とくに、維新から出発すると無血革命の条件は何かという問題設定が絵空事ではなくなる。他方、この比較研究には、日本国内と外国と双方から第一線の研究者に参加していただいた。国外に対しては各分野で優れた業績を挙げてきた研究者に参加を依頼する一方、国内からは主に若手の研究者に参加を呼びかけた。前者と対等に議論する経験を積み、将来、世界の学界で活躍する出発点としてもらうためである。

３．研究の方法

まず、比較対象は、17 世紀のイギリス、19 世紀のアメリカとフランス、19 世紀の日本、20 世紀のロシア・中国・イラン、21 世紀の所謂「アラブの春」を選んだ。これらには、地域だけでなく、時代にも大きな差異があるが、こうすると、近代の人類が経験した巨大な体制変動を公平に見直すことが可能となる。とくにロシアやフランスをモデルとしては見えないものが可視的になる。第二に、これらについては類型の分類より、共通する軸を立てて分析することを重視した。その際に注目したのは、各革命での「公論」と「暴力」の関係がどう推移したかという問題である。第三に、発表論文と討論には主に英語を用い、日本語との同時通訳を併用することとした。これは、最終成果として、英語による論文集を刊行するためである。日本の人文学は世界的に見てかなり高い水準にあるが、ほとんどが日本語で発表されるため、世界からはその存在が見えない。研究会で英語を常用し、その都度、成果を WEB 上に英語で公開し、最後に英文出版をすれば、この壁を崩せるかも知れないと期待した。日本に理系だけでなく人文学でも世界に通用する学問があることを世界に知ってもらう機会となり、それを通じて若手研究者が経歴の当初から世界の舞台で仕事する気構えを持つようになってほしいと考えたからである。具体的には、たまたまコロナ・パンデミックに遭遇したため、まずオンラインで世界を結びながら発表・討論を進め、最後に対面の会議を二回東京で催した。それらの準備としては、前もって日本語によるワークショップを開催し、専門外の革命について互いに学び合い、比較を始める備えとした。

４．研究成果

2024 年 6 月現在、研究会の成果を英文の論文集として公刊する準備を始めている。その目次案は次の表の通りである。その後に序論草稿の要旨を紹介して、成果の概観とする。

Table of Contents: Toward a Global Comparison of Revolutions: Changing relations between Speech and Violence	
Hiroshi Mitani	Toward a Global Comparison of Revolutions: a View from Japan
(Tōyō Bunko)	
Part 1: Britain	
Michael Braddick	England’s long revolution and the decline of political violence
(Oxford University)	
Gotō Harumi	Violence, Legitimacy and Public Sphere in Seventeenth-century Britain and Ireland
(The University of Tokyo)	
Part 2: North America	
Wanibuchi Shūichi	Civil War, Print, and the Legitimacy of Violence in the American Revolution
(Meiji University)	
Part 3: France	
David Bell	“The ‘Queen of the World’ and the ‘Volcano of the People’: Pen and Sword in the French Revolution”
(Princeton University)	
Hayakawa Riho	Martial Law and Popular Violence in the French Revolution
(Tokyo University of Social Welfare)	
Taira Masato	Electoral schism under the Directory of the French Revolution
(Bunkyō University)	
Part 4: Japan	
Hirosh Mitani	Born as Twins, Separated in Maturity: The Public Sphere and Political Violence in the Meiji Revolution
Park Hun	The Meiji Ishin, a Gradual Revolution: Utilization and Transformation of Traditional Ideas of Government
（Seoul National University）	
Shiode Hiroyuki	The Meiji Revolution and Newspapers
(Kyoto University)	
Part 5: Russia	
Ikeda Yoshirō	A quest for Soviet publicness in revolutionary Russia
(The University of Tokyo)	
Stockdale	“War Makes Revolution? Gauging the Impact of War and its Rhetoric on Russia's Revolutions, 1904-1932."”
(Oklahoma University)	
Part 6: China	
Fukamachi Hideo	Just a Prelude or Another Possibility?: The Kuomintang’s Unfinished Chinese Revolution
(Chuō University)	
Jeffrey Wasserstrom	China in Upheaval in 1911, 1927, 1949 and Beyond: One, Two, or Many Revolutions?
(The University of California, Irvine)	
Part 7: The Middel East	
Juan Cole	The Islamic Revolution of Iran and the Problem of Comparison
(Michigan University)	
Comments	
Watanabe Hiroshi	
Yamazaki Kōichi	
Appendix: basic statistics on victims	

国際研究会とワークショップを重ねた後、2024 年 1 月 21 日に最後の国際研究会を開き、研究代表者が来たるべき英文論文集の序論の骨子を発表した。その際の議論を参照して書上げた草稿第 2 版の要旨は次のとおりである。

問題の核心は、明治維新を手掛りに、各革命における犠牲者数の実態を明らかにし、それを抑制する条件を探ることにある。そのために諸革命を比較するが、それにはまず「革命」とは何か、定義せねばならない。20 世紀には「革命」とは君主制の打倒であるという信念が世界に流布したが、すると、武士という支配身分を廃止した明治維新は視野の外に置かれる。同様に、革命後に生まれる社会は世俗的となるという通念を維持すると、イラン革命が外れ、現代世界のかなりが理解不能となる。そこで、革命の定義は「短期間に生ずる『体制』(政治体制 and/ or 社会的権利）の意識的変化」とした。この薄い定義は公平な比較を可能とするはずである。

次に研究史との関係である。革命比較の先行研究で重要なものは、Crane Brinton '*The Anatomy of Revolution* '(1938), Theda Skocpol '*Social Revolutions in the Modern World* (1994), Keith Michael Baker and Dan Edelstein, eds. '*Scripting Revolutions'* (2015)である。ブリントンは最初の体系的な比較研究で、イギリス、アメリカ、フランス、ロシアを対象としたが、フランスを典型とするという限界があった。これに対し、スコッチポルはフランス、ロシアのほか、中国を対象に組込んだが、農民が深く関与する「社会革命」に焦点を当てたため、維新や都市型革命は視野から外された。ベイカー・エーデルマンの編著は、革命で使われる「筋書」に注目し、世界の革命をその変奏として捉えた。しかし、そこでは、フランス革命に始る系譜だけが注視され、明治維新に始る東アジアの系譜やイラン革命に始る系譜は無視されている。本研究は、これらに対し、「体制の急変」に注目することにより、比較対象をグローバルに拡大し、かつ、革命に伴う暴力に注目するという点で新たな視界を開こうとする。

さて、我々の比較は、まず各革命での犠牲を統計的に把握することから始めた。まず依拠したのは、次の浩瀚な辞典である。Micheal Clodfelter, Warfare and Armed Conflicts: A Statistical Encyclopedia of Casualty and Other Figures, 1492-2015, 4th ed., Jefferson, NC: McFarland & Company,2017. この中から、比較可能な指標として casualty を取出し、統計表を作成した。かつ、英・米・仏・日に関しては、より専門的な研究によりデータを置換えた。残念ながら、露・中に関しては、まだ最近のデータが参照できていない。次いで、各革命時の人口には巨大な格差があるため、これを人口割りとし、さらに時期を数個に区切って計算した。こうして革命での「暴力の強度」が比較可能となった。その結果、暴力強度は、1）革命ごとにかなりのばらつきがあり、2）同じ革命でも時期により変動し、3）対外戦争が生ずると飛躍的に高まることが分った（最大の強度を見せたのはイギリスの 17 世紀中期、最小は明治維新。詳細は省略する)。

次に維新に即して、その暴力の強度がなぜ最小に留まったのか、条件を分析した。まず、19 世紀半ばの日本にしか見られない固有の条件。その第一は国際関係が希薄だったこと。ヨーロッパと異なり、当時の東アジアでは、国家間の関係が希薄で、朝鮮も清朝も、日本の内乱に干渉しようとしなかった。第二は近世日本が持っていた「双頭・連邦」国家。二人の君主を一人に、大名の忠誠を江戸から京都に切替えることは、一王朝を打倒し、別の中心を創り上げるよりはるかに容易だった。

次いで検討したのは、幕末日本以外でも見出しうる一般条件である。その第一は、問題解決を主に交渉に依拠する政治文化である。近世 200 年余の平和はこれを慣行化し、幕末の政治紛争に当ってもこれが踏襲された。17 世紀のイギリスでは、第一革命は極めて暴力的だったが、世紀末の名誉革命ではできるだけ回避され、議会内の交渉が主たる決定手段に変った。第二は、イデオロギー論争の回避である。幕末の日本ではイデオロギーの上で王政復古に反対する勢力は存在しなかった。イデオロギーをめぐる正当論争は対立を激化させ、妥協を不可能としがちである。第三は、民衆の政治関与の有無である。ヨーロッパの諸例に見られるように民衆の関与は暴力を拡大しがちであったが、幕末日本の場合、政治交渉も武力対立も大名国家に独占されていた。第四は、外来思想と在来思想の習合・活用である。革命では同時代先端の思想や制度が参照されるが、それは伝統的な思想と対立を呼びかねない。日本では神の子孫と観念される天皇が主権の座についたため、西洋輸入の文物と神道との関係が深刻な問題となったが、明治後半までは何とか調整ができた。イランの場合は、王権による西洋化がイスラム信仰と衝突し、後者の支配が定着した。

以上は、明治維新を出発点として得られた知見であるが、近代の諸革命には、近世日本に存在しなかったものの、革命とその後の体制形成に重要な役割を果した諸条件があり、これまた比較のために重要である。その第一は議会である。近世ヨーロッパには、貴族が団体として王権と協議する議会があった。これは他地域には見られない政治制度であったが、17 世紀末のイギリス名誉革命で、議会が王権を上回る主権者となり、その後、これが政治的自由と政治参加を拡大する制度として世界に模倣されていった。それを支えたのは、第二の特徴、公開討論の政治文化と新聞などの印刷メディアであり、17 世紀以来、ヨーロッパに公共圏が成立するバックボーンとなった。第三は、現体制に代る秩序の構想とそれをめぐる議論である。明治維新では当初存在しなかったが、フランス革命では革命勃発の以前から様々の構想が提案され、立法により実現されるとともに、政争を激化させる一因ともなった。第四は、19 世紀末から登場した革命党である。議会政党と異なり、現体制の打倒を最優先の目標に掲げる政治団体で、20 世紀初頭のボルシェヴィキ革命の成功以来、全世界にこのモデルが採用されていった。第五には、革命後の体制が自由なものとなるか否かである。イギリスや日本など 19 世紀までの革命では自由な体制が成立し

たが、20 世紀の革命はロシアを始めほとんどが不自由な体制を生んだ。この分岐がどうして生まれたのか、それはまだ十分な説明を得られていない。

さて、我々の研究会では、比較の議論を通じて、革命は長期的な事象と見なすべきではないかとの見解が提出され、ほぼ合意を見た。明治維新の場合、1868 年の王政復古は途中経過に過ぎず、大名国家の廃止、それに伴う武士身分の解体、さらに武力反乱の終熄までには、政治動乱の開始以後、約 20 年を要した。しかし、それは短い方であって、フランス革命の場合には、革命の当初提唱された理念が安定した体制に定着するまでには 90 年近くの紆余曲折を閲したとみる見解がある。長期的な視点は、ロシアや中国の革命は無論、所謂「アラブの春」など未完の革命についても必要な見方であろう。次に、革命が定着するには何が必要だったかも重用である。革命には後退も失敗もありうる。それを乗越えて新秩序を保証する「歯止め」は何か。明治維新の場合、その第一は天皇の伝統的権威だったが、他にそのような例は少ない。「歯止め」は革命ごとに異なるものがあったが、一般的な要素もあった。その第一は革命を経て政府の財政能力が強化されること、第二は、国民教育を行って、民衆を国家に動員することである。革命にはとかく暴力が注目されがちであるが、新体制の定着にはこの二つの要素は不可欠である。

我々の共同研究は 5 年に及んだが、出発点では比較研究の経験を持つ者は皆無に等しかった。努力の末、上記のような知見を得たが、不十分な点は多々残されているはずである。しかし、今は、たとえ暫定的なものにせよ、この世界最初の試みの成果を世界に向って公開し、それがさらなる比較研究を誘発することを期待している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 三谷 博	４．巻 1
２．論文標題 英仏革命と明治維新－革命比較のための試論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 比較革命史の新地平	６．最初と最後の頁 262-284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田嘉郎	４．巻 11
２．論文標題 パリ講和会議とロシアの内戦	５．発行年 2022年
３．雑誌名 歴史の転換期11　1919年　現代への模索	６．最初と最後の頁 22-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 後藤はる美	４．巻 15
２．論文標題 ブリテン諸島における革命	５．発行年 2023年
３．雑誌名 岩波講座世界歴史　第15巻　主権国家と革命	６．最初と最後の頁 191-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 酒井啓子	４．巻 542
２．論文標題 アラブ民族主義と軍と左派 ： アラブ60年の栄枯盛衰	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中東研究	６．最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深町英夫	4．巻 95
2．論文標題 代表制の通時的・共時的考察 中国大陸・台湾・香港	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代中国	6．最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三谷 博	4．巻 8
2．論文標題 Japan's Meiji Revolution in Global History: Searching for Some Generalizations out of History	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Asian Review of World Histories	6．最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池田嘉郎	4．巻 35
2．論文標題 V．D．ナボコフとロシア革命	5．発行年 2020年
3．雑誌名 SLAVISTIKA	6．最初と最後の頁 187-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 酒井啓子	4．巻 2020－2
2．論文標題 イラン・米間緊張を反映するイラク国内政治抗争（特集 米国核合意離脱後のイラン）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中東研究	6．最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 塩出浩之	4．巻 871
2．論文標題 東アジアにおける新聞ネットワークの形成	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 58-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鰐淵秀一	4．巻 42
2．論文標題 ポスト共和主義パラダイム期のアメリカ革命史研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立教アメリカン・スタディーズ	6．最初と最後の頁 101-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三谷 博	4．巻 100
2．論文標題 講演 維新における「公議」と暴力 ： 双生児としての誕生から訣別まで	5．発行年 2019年
3．雑誌名 史叢（日本大学史学会）	6．最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　5件／うち国際学会　19件）

1．発表者名 三谷 博
2．発表標題 序論＝革命比較のための覚書
3．学会等名 革命比較研究会2023年度第1回ワークショップ(7月2日)
4．発表年 2023年

１．発表者名 三谷 博
２．発表標題 Toward a global comparison of revolutions: Questions to consider
３．学会等名 革命比較研究会2023年度第2回ワークショップ（12月3日）
４．発表年 2023年

１．発表者名 三谷 博
２．発表標題 革命のグローバル比較
３．学会等名 Toward a global comparison of revolutions（2024年1月21日）（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Jeffrey Wasserstrom
２．発表標題 China in Upheaval in 1911, 1927, 1949 and Beyond: One, Two, or Many Revolutions?
３．学会等名 Toward a global comparison of revolutions（2024年1月21日）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Yoshiro Ikeda
２．発表標題 Imperialist or Global Understanding of History? Asia, Europe, and Russia in Lectures on World History (Tokyo, 1944)
３．学会等名 Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies(ASEEES)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hiroshi Mitani
２．発表標題 Re-thinking Revolutions through Global Comparison
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Keiko Sakai
２．発表標題 Revolutions in the Arab States: Patterns of Revolution according to How the Revolutionaries Consider Their Nationhood
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hideo Fukamachi
２．発表標題 Just a Prelude or Another Possibility? The Kuomintang’s Unfinished Chinese Revolution
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yoshiro Ikeda
２．発表標題 A Quest for the Soviet Publicness in Revolutionary Russia
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Shuichi Wanibuchi
２．発表標題 Civil War, Print, and the Legitimacy of Violence in the American Revolution
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Masato Taira
２．発表標題 Electoral Schism under the Directory of the French Revolution: “Violence” from the Perspective of “Public Opinion
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Harumi Goto
２．発表標題 Violence, Legitimacy and Public Sphere in Seventeenth Century Britain and Ireland
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hiroyuki Shiode
２．発表標題 The Meiji Revolution and Newspaper
３．学会等名 革命比較研究会　第4回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hiroshi Mitani
２．発表標題 A Basic Argument for the Comparison of Revolutions
３．学会等名 革命比較研究会　第2回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoshiro Ikeda
２．発表標題 The First World War and the politics around Russian health resorts
３．学会等名 International Council for Central and East European Studies X World Congress（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 塩出浩之
２．発表標題 東アジア近代史のなかの明治維新：外国人（西洋人）の安全と自由から考える
３．学会等名 明治維新史学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 深町英夫
２．発表標題 直線亦或莫比烏斯環？ 孫中山的共和思想與近代中國的體制轉型
３．学会等名 辛亥革命110周年記念国際学術シンポジウム「東アジア世界と共和の創生」（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鰐淵秀一
２．発表標題 アメリカ革命における公論と暴力
３．学会等名 革命比較研究会 第5回ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hiroshi Mitani
２．発表標題 Opening Remarks
３．学会等名 革命比較研究会　第1回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 池田嘉郎
２．発表標題 第一次世界大戦期ロシアにおける保養地振興をめぐる政治
３．学会等名 日本西洋史学会大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 深町英夫
２．発表標題 Sanctifying Violence: The Making of the National Revolutionary Army in 1920s China
３．学会等名 革命比較研究会　第1回国際研究会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 塩出浩之
２．発表標題 東アジア公共圏の誕生:19 世紀後半の東アジアにおける英語新聞・中国語新聞・日本語新聞
３．学会等名 第4回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiro Ikeda
２．発表標題 Nikolai Astrov and Post-First World War Europe
３．学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Sakai
２．発表標題 Transformation of “Source of the Fame” in the Eyes of Political Blocs in the Post-2003 Elections in Iraq
３．学会等名 Middle East Studies Association（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計11件

１．著者名 酒井啓子	４．発行年 2022年
２．出版社 みすず書房	５．総ページ数 272
３．書名 「春」はどこにいった ： 世界の「矛盾」を見渡す場所から	

1．著者名 Keiko Sakai (co-editor)	4．発行年 2021年
2．出版社 Centre for Relational Studies on Global Crises, Chiba University	5．総ページ数 75
3．書名 From Protest to Ballot Box	

1．著者名 三谷 博	4．発行年 2020年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 405
3．書名 日本史のなかの「普遍」：比較から考える「明治維新」	

1．著者名 三谷 博	4．発行年 2020年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 252
3．書名 日本史からの問い：比較革命史への道	

1．著者名 Keiko Sakai (co-editor)	4．発行年 2020年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 252
3．書名 Iraq Since Invasion: People and Politics in a State of Conflict	

1．著者名 平正人	4．発行年 2019年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 298
3．書名 高橋暁生編『〈フランス革命〉を生きる』（「カミーユ・デムーラン―若き新聞記者が夢みた共和政」）139-162頁、2019年	

1．著者名 山崎耕一	4．発行年 2019年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 298
3．書名 高橋暁生編『〈フランス革命〉を生きる』（エマニュエル・ジョゼフ・シィエス－フランス革命の開始」）	

1．著者名 朴薫	4．発行年 2019年
2．出版社 ソウル大学出版文化院	5．総ページ数 502
3．書名 朴薫『明治維新と士大夫的政治文化』	

1．著者名 池田嘉郎	4．発行年 2019年
2．出版社 サンクトペテルブルグ国立電気技術大	5．総ページ数 435
3．書名 『ロシアにおける革命と内戦の時代：歴史と史学史の諸問題』（「内戦における兄弟の死に関するエヌ・イ・アストロフの回想」（原文はキリル文字）	

１．著者名 深町英夫	４．発行年 2019年
２．出版社 台大出版中心	５．総ページ数 324
３．書名 中國議會百年史　誰代表誰？如何代表？	

１．著者名 酒井啓子	４．発行年 2019年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 273
３．書名 現代中東の宗派問題 ： 政治対立の「宗派化」と「新冷戦」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Pen and Sword in Revolutions
https://kakumeihikaku.jimdosite.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	深町　英夫 (Fukamachi Hideo) (00286949)	中央大学・国際経営学部・教授 (32641)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	後藤　はる美 (Goto Harumi) (00540379)	東洋大学・文学部・准教授 (32663)	
研究分担者	鰐淵　秀一 (Wanibuchi Shuichi) (30803829)	明治大学・文学部・専任講師 (32682)	
研究分担者	酒井　啓子 (Sakai Keiko) (40401442)	千葉大学・大学院社会科学研究院・教授 (12501)	
研究分担者	塩出　浩之 (Shiode Hiroyuki) (50444906)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	池田　嘉郎 (Ikeda Yoshiro) (80449420)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	平　正人 (Taira Masato) (90594002)	文教大学・教育学部・教授 (32408)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ブラディック　マイケル (Braddick Michael)	オクスフォード大学	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ベル　デイヴィッド (Bell David)	プリンストン大学	
研究協力者	朴　薫 (Park Hun)	ソウル国立大学校	
研究協力者	フース　ハラルド (Fuees Harald)	ハイデルベルク大学	
研究協力者	ストックデイル　メリッサ (Stockdale Melissa)	オクラホマ大学	
研究協力者	ワッサーストローム　ジェフリー (Wasserstrom Jeffrey)	カリフォルニア大学アーヴァイン校	
研究協力者	コール　ホアン (Cole Juan)	ミシガン大学	
研究協力者	山崎　耕一 (YAMAZAKI KOICHI)		
研究協力者	岩井　淳 (IWAI JUN)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	早川　理穂 (HAYAKAWA RIHO)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計4件

国際研究集会 Toward a Global Comparisons of Revolutions	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 Pen and Sword in Revolutions 3rd meeting	開催年 2022年～2023年
国際研究集会 Pen and Sword in Revolutions 2nd meeting	開催年 2021年～2023年
国際研究集会 Pen and Sword in Revolutions 1st meeting	開催年 2020年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関